

世界遺産の在り方～百舌鳥古市古墳群の未来から考える～

社会班：小川 彩太 山田 快

要約

近年、世界各地の世界遺産の観光地で観光公害が多発しており、世界遺産に登録されたことによりかえって遺産の保存が困難になるという事態が発生している。このような事態を発生させずに世界遺産登録の元来の目的である遺産の保存を達成し、かつ世界遺産を観光資源として活用し地域経済活性化の契機とするためにはどのような方策をとるべきなのかということを2019年に世界遺産に登録された百舌鳥古市古墳群を例に模索した。

Abstract

In recent years, tourism pollution has frequently occurred in tourist destinations of World Heritage Sites around the world, and it has become difficult to preserve the heritage sites because it has been registered as a World Heritage Site. What kind of measures can be taken to achieve the original purpose of World Heritage registration without causing such a situation, and to utilize the World Heritage as a tourism resource to revitalize the local economy? I sought to find out whether it should be taken, using the Mozu-Furuichi Kofungun, which was registered as a World Heritage Site in 2019, as an example.

1. 序論

2019年、大阪府の百舌鳥古市古墳群の世界遺産への登録は多くの人に喜びをあたえ、一時大いに話題となった。しかし近年、世界遺産への登録が必ずしも地域社会にいい影響のみをもたらすとは限らなくなってきている。観光公害等の発生がこの最たる例である。我々はこのような世界遺産がもたらす負の影響を回避し世界遺産がよりよくあるための方法を百舌鳥古市古墳群を例に模索した。

2. 研究手法

日本において、世界遺産を有する都市の議事録を調べ世界遺産をどのように扱っているのかを調べ、それらの都市と堺市の対応を比較する。古墳群で実地調査を行い古墳群の現情緒課題を調べる。

3. 結果

実地調査を経て、我々は百舌鳥古市古墳群が観光公害を起こし得る程の観光的な魅力がないと考えられた。

したがって、世界遺産を観光資源として活用した地域経済の活性化が求められる。今後もPR活動を持続し知名度をあげて、文化体験等を通してその地に関する知識のない観光客に地域のことを知ってもらう必要がある。また、世界遺産だけではなく地域の交通網などを一体的に整備することにより、観光公害などの予防につながり地域そのものを観光都市として発展させていくことができる。

4. 考察

地域全体を一体的に整備し、訪日外国人や遠地からの観光客などその地についての知識のない人々の地域文化理解のために世界遺産を活用することが、世界遺産を観光資源として価値のあるものにさせる。そのために、多言語対応や文化体験、先端技術を駆使した情報の発信などを講じていくことが求められる。

5. 結論

世界遺産を独立した存在として捉えず、地域社会の要素の一つとして包括的に捉え、世界遺産のみにフォーカスした方策をとるのではなく、地域社会を一体的に整備していくことが求められる。